

教えて センセイ

吉川徹先生に聞く〈ひのえうまの話〉



日本でもっとも罪深いひのえうま迷信
そこには社会学的なメカニズムが存在しました

吉川 徹

(きつかわとある)

1966年島根県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。現在、大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は計量社会学、現代日本社会論。主な著書に『現代日本の「社会の心」』（有斐閣）、『学歴分断社会』（ちくま新書）、『学歴と格差・不平等』（東京大学出版会）、『学歴社会のローカル・トラック』（大阪大学出版会）、『日本の分断』（光文社新書）などがある。

ひのえうま迷信の背後にあった家父長制の規範

令和8年の干支は午（馬）。うまはうまでも、「丙午／ひのえうま」年と聞くと、年配の人は「とうとうやって来たか」と不安を覚えるかもしれません。それは、ひのえうまにまつわる迷信が長い間、日本社会に大きなインパクトを与えてきたからです。前回のひのえうまにあたる1966（昭和41）年は、赤ちゃんの数が前年より46万人も減ってしまいました。その前の明治のひのえうま（1906年）生まれの女性は適齢期を迎える頃、結婚の厄難に遭い、世をはかなんで自殺した人が少なからずおり、江戸時代のひのえうま年では女兒が生まれると間引き（密殺）されるケースが後を絶たなかったといえます。ひのえうまをまったく知らない人がこのよう

め、60パターン（10と12の最小公倍数）で一巡します。どれも60年に一度しか登場しませんが、「丙午／ひのえうま」だけ「この年に生まれた女性は気が荒い、嫁ぎ先に災いをもたらす」などの風説が流れました。

迷信の始まりは360年前の1666（寛文6）年、八百屋お七が江戸の町に火をつけた事件で、お七がひのえうま生まれであったとされることから、ひのえうまが烈女の代名詞として扱われるようになりました。ただ初期の頃は生死にかかわるほどの圧力が女性たちに加えられていたわけではありません。社会的なニュアンスが強調されたのは後に続く、享保（1726年）や天明（1786年）のひのえうまが巡ってきたあたりです。この頃になるとメディアの影響も大きく、NHK大河ドラマ「べらぼう」は江戸時代の版元、葛谷重三郎の生涯を描いていますが、彼が活躍した1700年代後半は大量の出版物が市中に流通しました。草紙や戯作にはひのえうまの女性は気が強いだけでなく、夫を次々喰い殺すとか、人を祟るなどと荒唐無稽に描かれるようになり、彼女たちをスケープゴートすることで家父長制の規範を外れる行いをしてはならないというストーリーが展開されました。歌舞伎や人形浄瑠璃の演目にも登場し、ひのえうま迷信が世間に浸透しました。

ちなみにひのえうまの女性は美人に描かれやすく、井原西鶴は戯作『好色五人女』で八百屋お七を絶世の美人と書いています。江戸時代の川柳にも「ものすごい美人だが残念ながらひのえうまだ」のような作品が多数登場します。なぜ美人でないといけないのかというと、家父長制の反対にあるのは男女のロマンティッククラブなので、家の釣り合いがとれない恋愛結婚は絶対避けたい。美人に目がくらむと家父長制が守れないため、過ちを未然に防ぐ意味でひのえうま女性は縁起が悪いと決めつけ、利用したためなのです。

高度経済成長期の人口抑制に一役買ったひのえうま

近代に目を向けましょう。明治のひのえうま、1906年は前年にポーツマス条約が調印され、日露戦争は終結しますが、20〜30代の男子が徴兵されていたので、出生数が低下。もともと子どもが生まれにくい年が偶然ひのえうまだったので、これ以上出生数の減りようがありませんでした。昭和のひのえうま、1966年は高度経済成長期で景気がよく、人口が右

な史実を聞くと「ひのえうまはなんて恐ろしいのだろう」と驚くことでしよう。この迷信は江戸時代に起きた事件をきっかけにひのえうま女性が忌み嫌われ、人の生き死にまで影響するようになったとされています。私は60年周期でやってくるひのえうまについて、避けがたい悲劇だったとみるのではなく、それがどのように社会に受け入れられ、利用されてきたかというメカニズムについて読み解いてみました。

まずは干支について知っておきましょう。古代中国において日付や時刻を数える符号の「十干」（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）と「十二支」（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）が編み出され、これらを組み合わせる「十干十二支」の暦が東アジア一帯で使われるようになりました。年の識別には庚午の年、壬申の年というように2種類の符号を組み合わせた。ここにもひのえうま迷信に乗った社会の規範が存在したのです。

戦後、食糧難を経験した日本は、1950年代から自治体やミルクメーカーによる赤ちゃんコンクールが開催され、健康優良児がもてはやされました。体を大きくするには人工乳が都合よく、そのため母親は母乳をやめるのですが、すると月経がはじまるので妊娠しやすくなり、年子が多く生まれます。多子化の時代でもあったので人口爆発を避ける意味で、「子どもは2人、間隔は2〜3歳開けることが望ましい」と助産師たちによる避妊指導が行われるようになりました。「新生活運動」と称し、近代的な暮らしをしようというわけです。たとえば50㎡の住宅住まいだと子ども2人が限界で、福利厚生費を負担する企業にとっても都合がいいですね。くわえて、メディアがひのえうまに目を付け、ひのえうま報道が熱を帯びるようになると「明治のひのえうま女性は縁遠く、不幸な人生だった。女の子を産んだら大変だ」とか「迷信を信じるな」など、喧々諤々の様相に。この結果、何が起こったかというと、明治の悲劇を覚えていたお年寄りによる伝統的な価値観と近代的合理性にかなった計画出産、マスメディアの発達という奇跡のコラボが成立し、爆発的に出生数が激減したのです。昭和のひのえうまは、迷信を鵜呑みにして出生数が減った「事故」ではなく、社会学的メカニズムによってもたらされた「現象」なのです。

翻って現代は、ひのえうま騒動が起こせないほどの少子化になってしまいました。出産適齢期の女性は平成生まれとなり、干支で生まれ年を言う習慣すらなくなっています。ひのえうま迷信が息を吹き返すことは二度とないでしょう。

